

1新入社員入社式の社長のあいさつ

三つの心がけを忘れずに

元凸版印刷社長 山田三郎太

諸君、ご入社おめでとう。心からお祝い申し上げます。多数の志望者の中からきびしい就職の関門をみごと突破され、本日ここに集まれた諸君に私たちは大いに期待し、全社あげて歓迎いたします。

学生生活から社会人の生活にかわることは、精神的にも肉体的にも一つの大きな変革であります。ただ漫然と毎日を送っていくという生活態度ではとても成功は得られません。一貫した強い精神的支柱とでも申すべき平素の心がけが大切であります。私は、自分の体験をお話しすることによって、この「心がけ」というものにふれてみたいと存じます。

私は、ずっと昔、東京大学を卒業し当社に入社してすでに三十有余年になります。当時の総長は亡くなられた古在由直博士という白髪の老人でした。三月の卒業を間近に控えたある朝、本郷西片町の通りを歩いて大学へ向っていたら、ちょうど古在総長の大学に行かれるところに出会いました。私は、古在さんとわかったののでいねいにおじぎをしました。総長から在学中のことをいろいろとおたずねがあり、その後で、「君はこれから社会に出て、どこで働くようになるだろうとも、次の三つのことは忘れないように心がけて、毎日働くようにしたまえ。そうすれば、決して失敗することはないだろう」

といって、次のようなことをおっしゃいました。

「まず第一番は、会社なり、役所に入ったばあい、毎日、毎日、今日から入社したんだという気持ちでいること。そうすると、いつも緊張してまじめに仕事にうちこめる。人間は同じ所に長くいるとだんだんなれてきて、変に要領ばかりよくなっていく、それをいつも新鮮な気持ちで働くように心がけることだ。

第二番は、一切不平をいわないことだ。とかく仕事になれてくると、こんなによく働いているのに給料が少ないとか、昇進しないとか、また上司がよく面倒をみてくれないとか、不平をいうが。これは本人の慢心というものだ。不平をいう前に、どこがまだ自分にとって不完全であるかということについて反省することである。

第三番目に注意すべきことは「陰ひなた」をしないこと。上の人や同僚がよくみているからよく働く、だれもみていないからなまける。という気持ち、これが一番いけない。だれがいようが、いまいが、いつもニコニコとよく働くということが続けることが大切である。よく役所や会社にくくと、課長が不在の時分など、役人や社員などが、足を机の上に乗上げて新聞を読んだりしているのを見かけることがある。しかし、ドアを押して上司が入ってくると、急に姿勢がよくなって、いかにも働いているように見せかける情景、あれはそばから見ていても寂しい気もちがするものだ。この三つのことは、いつも忘れないように心がけながら働く習慣をつけることが必要だと思う。そしてこれさえ守って働いていれば、きっと周囲の人たちは、君の真実性を見ぬいて、だんだん重要な仕事を与えるようになるだろう」というようなお話を伺いました。

私はその時「こんなことは、どこの小僧さんでもいつもいわれていることで、たいして新しいことでもないわい」と感銘することもなく、耳に入れていたていどでした。さて当社員になったとき、この言葉を思い出して実行しようと心がけてみましたが、一つ一つなかなか難しいことです。かんたんにやれそうなことで容易でないことがわかりました。それでも絶えずこの三つのことを守って働いているかどうか、厳しく反省してみることがたびたびでした。そして半分でも三分の一でも、これが実行できたらと、毎日、毎日を仕事の中に送ってきました。私は過去をふりかえって、「なまけている」とか「不平が多い男」とか「緊張さが欠けている」という小言を一度もうけたことはありません。さしたる能力もなかった私が、今日、社長になり得たのも、この時の古在総長の教訓によって開眼したことによるのではないかと、いつもありがたく感謝しています。

諸君もこれから、日常きつといろいろの煩悶や不平などが心の底に湧いてくることが多

いでしょう。そういう時、ぜひこの三つの教訓を心によみがえらせて下さい。そうすると、今の自分の働き方が十分この教訓にかなっているかどうか、おわかりになるでしょう。そしてもし不足のところが気づかれたらお直し下さい。そうすると、気分も一新され、清々しい晴れ晴れした気持ちになって、勇気が一段と湧いてくるでしょう。そういう毎日を送るように心がけていければ、きっと、諸君の前途は明るく光り輝き、立派な大成された人となれるでしょう。

どうか体に十分気をつけて、若々しく元気に、今から始める仕事に精一杯励んで下さい。私はあなた方が一人残らず立派な社員になられ、やがて会社の中核になるよう祈ってやみません。

■古在由直 大正九年から昭和三年まで東京帝国大学（今日の東京大学）の総長。農学博士。総長時代の業績として最も注目されるのは足尾銅山の鉍毒問題について、渡良瀬川流域の農地を最初に調査し、政府、地元の圧迫を受けながら、私費と学生の奉仕活動によって、鉍毒の実態を科学的に証明した。